

# ちがう立場になって読んでみる

## ークラスで宮沢賢治「注文の多い料理店」を推薦しようー

細川 太輔

### 1. 課題意識

国語科部では「言葉を使って豊かに生活する子の育成 -読みを中核とした感性と論理を育てる学習の追究-」というテーマで今年度から研究をしている。教科理論にも書かれているが、言葉を、表面的に意味を考えずに使う子どもが増えている。そのため言葉に実感をもつ子どもになってほしいと私はずっと願っている。言葉の意味を解釈し、言葉に意味をこめて表現してコミュニケーションをしたり、思考をしたりする。それができる子が言葉を使って豊かに生活する子であると考えている。

では文学的文章の学習でどうやって言葉を使って豊かに生活する子を育てるのか。それは感性と論理の両面が文学の解釈で身に付けることであると考えている。言葉を言葉としてとらえるだけでなく、言葉の奥に潜んでいる意味や象徴やイメージを見つける思考や、言葉の総体である作品から主題を見いだす思考は感性とも言えるし、論理とも言える。作品の世界を支えている意味の構造を論理で解釈し、そこから感性で感動していくからである。そのような言葉からいろいろな意味を見いだす思考を文学の解釈で経験する事で、日常生活でも他者の言葉の意味や、その言葉の背景などを理解できるようになると考えている。本稿では言葉の総体である作品から意味を紡ぎだす過程を思考ととらえ、それを深めるための手だてを追求することにした。

### 2. 研究の視点・手立て

本稿では以下の4つの手だてで、児童に深く考えさせることにした。

#### (1) 多様な考えの中から取捨選択して自分の考えをもたせる

ただこう思う、というだけで高学年の段階では深く考えるとは思っていない。本当にそうなのか、多様な立場の意見を吟味し、批判し、その中で残ったものが自分の意見とさせたい。そのため3つの手だてをとった。

1つ目は最初に解釈の選択肢を作ることである。いきなり子どもに考えさせるのではなく、多様な解釈の選択肢をあらかじめ提示して多様な考えを見せる中で、多様な可能性を考えながら自分の考えをもつことができると考えた。

2つ目は議論で解釈をぶつけ合うということである。最終的には解釈の多様性を認めながらも、相手の意見に反論をぶつけることで、その解釈が本当に成立するのか考えることができるようにした。多様な解釈が並列的に並ぶのではなく、解釈がぶつかり合う中で解釈が深まっていく。友達の意見を批判するのはなかなか小学生段階では難しいが、10月から毎朝のスピーチで、反対意見、反論を行わせて、そのような思考方法に慣れさせるようにした。

3つ目は新聞に貼る自分の意見を書く際に自分とは異なる意見を批判して自分の意見を書くようにさせた。自分の頭の中で議論をし、多様な意見を吟味して最終的な意見を書き、それを新聞に貼ることで、吟味した自分の意見をもてるようになると考えた。

#### (2) 主体的に読ませる

「注文の多い料理店」は教師が読むことを決めた教材ではない。秋でどんぐりがたくさん落ち始めたころに、

こんな話があると私が「どんぐりと山猫」を紹介した。「どんぐりと山猫」の不思議を3つクラスで追究した後、子どもたちが推薦したい宮沢賢治作品を選び、不思議に注目しながら推薦カードを書かせた。そのカードを交流した後、クラスで保護者相手に推薦したい作品を決めた。それが「注文の多い料理店」である。子どもたちが注文の多い料理店を読みたくなるよう、「どんぐりと山猫」から単元を始めたり、4月から注文の多い料理店の立て札をおいたりした。子どもが不思議に思い、楽しめる作品であるから「注文の多い料理店」を選ぶことは予想がついていた。教師が読む作品を決めたのではなく、子どもが決めた作品なので、子どもは主体的に解釈を行っている。家で宮沢賢治の作品を読んできたり、インターネットで調べてきたりする児童もいる。ゲームソフトを買うためにとっておいたお小遣いで宮沢賢治の本を買う児童もいるほどである。子どもが読みたい、と思う単元計画は深く考えるために必要不可欠である。

また場面ごとに区切って読むのではなく、子どもが不思議に思うところを中心に読むことにした。子どもが読み深めたい、と思う場面を取り上げて解釈することで、多様な視点が生まれ、議論が活発になり、解釈が深まると考えている。子どもの「大好き」「お気に入り」「はてな」を大切にした授業を計画した。

### (3) 解釈の根拠を複数もたせる

筆者は子どもの解釈の根拠は4つを考えている。

1つは本文である。当然本文をしっかりと読まなければ解釈は深まらない。

2つ目は資料である。子どもには宮沢賢治の作品にいろいろな場面で出会わせている。子どもが調べてきた『注文の多い料理店』の序文や宮沢賢治が書いた解説、猫に関する文章は印刷してクラスで配布をした、それらの資料は子どもの解釈の根拠となると考えた。

3つ目は他の作品である。子どもには並行読書をさせている。学校司書の協力で、図書館の時間に読み聞かせをして頂いたり、図書室の本だけでなく、隣の小金井中学校の本まで借りてきてくださったりして、教室に宮沢賢治文庫を作ることができた。毎朝5分は宮沢賢治の作品を読む時間を取ったり、宮沢賢治カードを作り、学校や家庭で読んだ本を記録させていったりした。並行読書は読書量を担保するだけではなく、他の作品を読むことで、作品を解釈する根拠を見つける手がかりとなる。例えば『注文の多い料理店』に「注文の多い料理店」は4つ目に掲載されているが、最初に「どんぐりと山猫」があり、同じ作品集の「山猫」でもあるので、共通点も多い。1つの連続したお話というだけでなく、シリーズとして読む中で、解釈が深まってくることは考えられる。

4つ目は自分の経験である。言葉を言葉として受け止めるだけでなく、その意味を具体的にイメージすることを重要と考えている。普段から、具体的な事象を言葉と言う抽象的な記号に置き換える活動である、生活文や日記に毎日取り組んでいる。生活という形のないものに意味を与え、抽象的な記号にする活動を普段から行うことで、言葉に具体的なイメージをもたせる思考力を育てている。

この1～4は子どもには根拠として示しているが、実際は学習経験として積み重なっており、それが融合して自分の解釈を作っているため、特にどの根拠を中心に解釈を作るかは限定はしない。しかし1つの根拠ではなく、複数の根拠をもたせることで、思考が多様化し、深まると考えた。

## 3. 授業の実際

### (1) 単元名・活動名

クラスで「注文の多い料理店」を推薦しよう

—「注文の多い料理店」不思議新聞づくり—

(2) ねらい 単元の目標・評価

関心・意欲・態度	読む能力	言語に関する知識・理解・技能
物語を解釈する楽しさを味わうことができ、これからも読みたいという意欲を高めることができる。	<p>叙述が暗示している意味に多面的な読みをもつことができる。エ</p> <p>発表したり、感想を聞いたりして自分の読みを広げることができる。オ</p>	<p>隠された比喻など、表現の工夫に気付くことができる。ケ</p>
物語を解釈することに前向きな感想を書いている。	<p>叙述から複数の読みを許容し、新聞やノートにまとめている。</p> <p>話し合いを通して、複数の読みの中から自分の読みを作り、ワークシートにまとめている。</p>	<p>山猫、紳士、色など多様な意味が考えられる言葉に着目して自分の読みを書いたり、発表したりしている。</p>

(3) 授業の分析・考察

① 選択肢の重要性

本実践では、発表者グループが前もって解釈の選択肢を作り、それを基に、または批判して自分の読みを作る活動を取り入れた。例えば以下のような場面があった。児童は、「しろくまのような犬」が生き返った理由について話し合っている場面について話し合っている。

C25	<p>考え②の全部幻覚だったに反対なんですけど、全部幻覚だったら、犬も死んでいないってことにして、宮沢賢治さんの文章には、「犬は死んだ」って書いてあるから宮沢賢治さんは、犬が死んだって書いているのに全部幻覚というのは、ちょっと面倒くさいから、<u>書いてあるのに幻覚だったっていうのはおかしい。</u></p>
C26	<p>ぼくは、<u>考え③に反対なんですけど</u>、例えば、「いらっしゃい」とか「舌なめずり」というのは、レストランの中でお肉とかサラダとか出されるじゃないですか、それを食べられるから、宮沢賢治さんは、<u>食べられるものの気持ちになって、それを考えたんじゃないか</u>と思います。</p>
T	<p>食べられるっているのは、殺されて食べられるっていうこと。だから、書いたんだ。</p>
C27	<p>私は、<u>①に反対なんですけど</u>、山の守り神にとっては、紳士のように勝手に「タンターン」と撃っちゃう人は、<u>困るから、反省したから</u>とって、また反省したのを忘れて危ない人間は食べるからとかと思うから、反省したからとは違うと思う。</p>
T	<p>これさ、反省したのかな。</p>
C	<p>ちがう。</p>
C28	<p>①に反対で、反省したって書いてあるじゃないですか、<u>でも、「十円だけ山鳥を買った」ってあるじゃないですか、多分まだ反省しきれていない</u>んで、この山猫軒のことを忘れないために、紙くずのように顔をしたんじゃないかなと思います。</p>

傍線部で紹介したように児童は、発表グループが挙げた選択肢を批判し、自分の意見をもっている。「紳士が反省したから」という発表者が作った選択肢に対し、c27は紳士があまりにひどい行動をとっていたこと、c28は最後に10円だけ山鳥を買ったことを根拠に批判をし、自分の考えを作っている。テキストから独力で考えるよりも、発表者グループの選択肢を最初に挙げておくことで、それを批判し、乗り越えて自分の意見を高めている。このように選択肢を前もって挙げさせることは、選択肢にとらわれるという危険もあるが、選択肢を基に議論さ

せることで、読みを深めることができると見ることができよう。

## ②自分とは異なる立場を批判して自分の読みを作る。

毎時自分の考えをカードに書き、それをまとめて新聞を作る活動をおこなった。そこで自分とは異なる立場を受け入れながらも批判し、自分の解釈を書かせるようにした。

例えば「紙くずのようになった顔がもとのとおりになおらなかった」この意味について児童が次のように書いている。

私は、①と④のミックスだと思います。理由は、山猫軒では、山猫に食べられそうになり、がたがたふるえています。山猫軒の外へ出ると猟師に「おおい、おおい、ここぞい、早く来い」とえらそうな発言をしているからです。

確かに②の不思議な世界だからクリームも不思議なものという考え方もありますが、体中にクリームをぬっているのに、顔だけが紙くずのようになるのはおかしいし、ちゃんと「牛乳のクリーム」と書いてあるのでちがうと思います。

また③の意見はクリームのせいの紳士の顔だけ年をとったというのは、おかしいと思うし、②と同じ理由でちがうと思います。だからわたしは①と④のミックスだと思います。

ぼくは、どれでもなくて、①に近いんですけど。①は失礼な行動をすると怒りにあうことを紳士の心にきざみつけるため、山猫が神という意見なんですけれど、ぼくは「山猫」が神という意見以外は同じで、山猫が神に反対です。そう考える理由は、子分の猫が、「どうせぼくらにはほねもわけてはくれないんだ」とあって、これは本当に食べているということで、確かにこれはおどしだという意見もありますが、「こそこそ言っている」と書いてあるので、聞こえてたとは限らないし、しかもこの文は読者に向けて書いてあるので反対です。しかも舌なめずりまでして、これは神のすることではないし、紳士を食べようとしていたら、命を大切にしていなくて、山猫が神という意見に反対です。(筆者注児童の中には山猫が神なら命を大切にすることで紳士を食べないという考えがある。もし食べるなら、命を大切にしないからと言って紳士を罰しはしないだろうという考えである。)

下線部のように「確かに～」という言葉を使って自分とは異なる立場で解釈をしてみても、それでもやっぱりぼくはこう思うんだ、という意見を書いている。これは自分はこう思うという一つの立場からの解釈ではなく、いろいろな解釈を吟味した上で自分の解釈を深めていると言えよう。

## 4. まとめ

以上のように2つの視点から児童の解釈の深まりを分析してきた。一方向からじっくりと考えることも確かに大切である。自分なりに具体的に解釈したり、動作化したり、イメージ化したりすることによって解釈が深まることは当然ある。本稿ではそれを低・中学年でじっくりと取り組んだ上で、高学年ではそれをいろいろな立場で解釈するということを提案する。児童は自分とは異なる立場に自分を一度おき、そこからどのように解釈できるかを考える。その上で、自分の解釈が妥当かどうか吟味をし、自分の解釈を深めているのである。

まだ児童は多方面から解釈していると言っても、賛成・反対のレベルで、その解釈が本当に成り立つのかという生産的な批判が行われる話し合いにはまだ到達していない。議論のレベルを止揚し、論点や根拠を明らかにするような話し合い、授業を考えていきたいと考えている。